

——はじらうことをやめたら、人はおしまいだ。

電球のはずされた茶の間。頭を撫でられながら、ふたりで観る一本のビデオテープ。女が手に持つ精液をたたえた長細い透明な箱。穿たれたふたつの穴にまぶたをあて、眼をあける。生殖の論理からはずれ、もう役立たないものを透かして、なにかを見る。性別のあるものは皆、底が割れる。もううまれないものが永遠のなかにちいさなさよならがあることをあいし、月夜の晩のボタンとなる。白濁した液体からこちらを覗いていたのは、だれだったのか。

「どうだ、おもしろいだろう？」

これが、父親とのさいごの団欒……、

蒼白い顔の彼女が正しい。恐怖に見守られて顔の筋肉の張りで眼醒め、気の抜けた笑い方をした彼女が。薄明りのなか。蒙古斑の濃い尻を家畜のそのように追いながら、ぼんやりとあたりをうかがっている、父親の深く窪んだ眼。それを警戒するも、サドルにまたがってペダルをこぎ、小さな恍惚を幾分かあじわうはためく長い髪。濁りの中へ消える、うつろいやすく、誰のとりこにもならない後ろ姿。肩に手を置かれアパートの入口をくぐる。じゃらじゃらと鍵のぶつかり合う音から鼻筋を、葦色の畳に向ける。泥だらけのスニーカーを脱ぎ手さぐりでスリッパにはきかえ、口を半びらきにした父親は白眼をうるませ、彼女をふりかえる。同じ足癖で汚れたちいさな履物を両手に持ち、パーカーは袖を太いひじまでまくりあげ、土埃を立てるほど打ち鳴らす。

「きたないの？」

父親は薄いひたいを抱き寄せる。黒々と分裂する濃密な細胞のように彼女の髪や瞳の上に、細かにかわいた唇が降りてくる。ステンレスの流しで、盥のなかでまわる夕餉の皿にこびりついた残り物。……死んでいて、だから胸のうちで父親に宛てて言う。

生まれた時から、ものだと思っていた。血のつながりの思いや愛着は時間をかけて作りあげた、垢みたくないもの。隙間のないはずの夢に父親の荒い息遣い。眉を寄せ、軽く爪先に力をいれるとうやうやしい身ぶりで細っこい腰を持ちあげた。発疹が斑に落ちている背中と腋、腹部や足のつけ根を父親は、軟膏で湿らせる。生気の欠けた虚のような歯並びから洩れだす微生物のにおいまでも、じっと彼女を見据えて。

「おまえ何しているんだ」

上唇がめくれ、歯茎まであらわにして笑う父親の声は、うわずっていた。

「可哀そうな奴だなあ」

まなうらで眼球が物狂わしい羽搏きをする。彼女が選んだのはとびきり従順で自身に無関心な自分。……お互い、何も知ることはできない。朝、耳に入りこんだ嘆きの死骸を見つけるまでは。

「お誕生日おめでとう」

最後に泣いたのはいつだっただろう。唯一の友人からの音信は途絶えた。大雪の日、赤いウールのニットの上へ、草臥れたチェックのダッフルコートを着こみ、病院に死んだ友人の見舞いへ行った。玄関の笹の雪が彼女の頬にかかったことも束の間、脚もとから暖かい空気が湧きのぼってくる。受付で面会者表の患者名記載欄に名前を書く。職員が探るような目つきで彼女をみつめた。事務員が席を立った隙に階段をのぼる。病棟までの廊下は

外の舗道よりも一層さむい印象。あの奥、カーテンもなく、わずかに接触しうる患者との抱擁以外に血の揺らぐことも禁じられた病室。あらゆる陰湿な苦痛を噛み潰し病衣にすっかり身体を埋めるようにして自由を一切奪われて。ベッドで充血した両目を見開いたまま、腰にできたまるい傷までうるませていたの。彼女と友人のどろろががっていたのか。髪の毛が凍るつめたさに固くなってゆく錯覚が腕にまで伸びる。労働を終えた厚ぼったい掌。父親のまなざしに、たっぷりと肉のついた表情が和らぐ。硬直する。彼の下腹のあたりに漠とした暗い、鼻をつく酸っぱい重さがひろがってゆくのがわかった。

「俺に今日のひとがどうだったか隅々まで報告なさいよ」

「あたしが教えたげてないことまでそいつは教えたのかよ、おい」

彼女を媒介にしてされる父親のてすさび。辱められているとき決まって、かぼそい旋律が舌を濡らした。うたは、もつともふるい祈りのかたちであり、かみさまとの交信手段であったと何かで読んだ。この盲目の獣は、彼女が自分の分身であるとかんがえを通りこし、もはや自分の一部であると思っっているのだ。俺のものに俺が何をしようと勝手だろ。だが、あやまって打つけてしまった自分の脛を、人は更に痛めつけたりしない。それはさすっていたわるものなのに、別の意思を持つ彼女という名の素足は、思いきり殴打された。やがて誰もうたわなくなる。

他の男を寄りつかなくするために無理やり食べさせるだけ食べさせられたの。それでこんなにぶくぶくになっちゃった。今ね、服を買いに行っても店員にせせら笑われるだけ。だから頼んでもいないのに買って来た服を全部燃やしたんだけれど。まぎらわすしかない、何も考えたくない。安心して眠りたい。もはやだれにも会えない気がする。いまいちど会いたかったひとを教えて、吐息が白くなるまで生きて。呼吸をしてきたぶんだけ出逢い別れてきたのだと。だからときどき、窒息したくなるのだ。頼りない紐なんかを首に巻きつけて、それをひっぱってすべての明かりを消してやるのだ。重ねに重ねてきた愛情という名の視野を、ひとは父親や彼女と呼ぶのだろう。ひとの所有できるものがなにごととしてないのは、なにもかも他なるものだから。神経の尖まで父親で染められきっていることが、どこにいても彼女を孤独にさせた。あしうらにやや遅れて足指の落ちる廊下の軋み、いびつにひき摺られた足音が肉割れのできた身体のいたるところに魚の卵を生みつける。じわり……そのいくつから憎しみがまばたきをし、彼女を栄養袋にして、やがて憐れみに殺意が柄となってあらわれる。友人に蒲団のなかから電話をかける。かけているうちにようやく意識をうしなう。

着信。ひどくかすれた声で、ゆっくりはなしのときに電話頂戴と留守電には吹きこまれていた。仕事から帰り、重たい身体をゆらして、正座するベッドのうえ。受話器の向こうの父親は、うわべだけの用件を伝えたあと、ときおり奇妙な呻き声をあげてはやくちにしゃべくった。

「俺たち、相性がいいよなあ」

「おまえは死んだかあちゃんよりうまい所もある、先天的なものだろうか」

「あたし、変態だから」

彼女がドライアイスなら、父親は消費期限のとくに切れたミルクティーみたいなものだ。それが注がれたらばらばらにはじきかえす。そしていつまでも舌打ちして。父親は、いまの彼女を想像していたのだろうか。乳房、口唇、舌、剃毛のなされた局部、肛門。爪の短く切られた手。なんという身軽さ。必要なものはこれだけなのだ。一瞬ごとに誰かの体液が身体と身体のはざまを共にして流れる。いつものホテルの一室、湯の充滿した水道管から生じる熱をふくんで、寒くはない。同情と嫌悪が混ざり、驚くには疲れすぎてそれに釣りあうだけの力もなく

蒲団の上で両腕をさしあげ、スマートフォンを眺める。逆光、友人と彼女、ふたりがうつたつた一枚の写真があやまって消去され、ビデオボタンが押される。

「いうことをきかない、思い通りにならない娘というのがおしえることの芯なのだ。おしえるという本来ならばひとときの通過点である儀式を永遠にしたのしむために、娘は娘として未熟でなければならぬ」

声かけ待ちで知りあった一夜限りの男の囁れ声に懐かしいものを感じて、彼女の四肢は前へ前へと押しもどされる。父親は笑いながら水面に指先を近づけてしきりに動かす。なにかが口をぱくぱくひらきながら群がってくる。父親はそれを、いかにも可笑しいものを見るように、ちいさく叫ぶ。

パソコンに映し出された動画に、十数秒入るシャンプーの広告。少女たちが歓声をあげて操縦する自転車の画面を下へスクロールしてゆくと、彼女へのリンクが貼ってある。ぴったりとくっついてある感覚。彼女はかわくのを待っていてそれに触ろうとするのだが、それは簡単にちぎれて室内を汚してしまう。もう、女の肉体は触れられる場所にはないよ。これが、人と彼女の間にある距離を増やす鏡なのだ。渋谷のスクランブル交差点。踏まれるしぶとい雪がいつしか歩調を乱してゆくのに似て、拡散された彼女は、回収されることもだれかの観念になることもなく、数多の人ののはじらいを吸う濡れた麩となつて散らばっている。鯉たちは彼女などみていない。手指のその動きに自らの欲望をうつして喰らっているだけだ。ふいに、着信音。

「おとうさん、どうしてる？」

「うん、来てるよ、炬燵にいる」